

一知的障害者のアイロン作業における自立的な作業遂行と作業量の促進

瀬下智寛

I 問題及び目的

知的障害者入所施設では、利用者の作業活動の設定と作業参加の質の向上が課題の一つである。社会的に価値のある利用者の自立的な作業遂行を増やして行くことで、利用者の施設生活の質が向上すると考えられる（倉光・園山・近藤, 2005）。

施設の作業活動では、同時に多くの利用者に支援することが職員には求められる。利用者一人ひとりの作業活動に対して、きめ細かな支援の重要性が認識されながらも、実際には困難なことがある（黒木・納富 2005）。利用者が作業の準備、遂行、確認、片付けという一連の作業プロセスを可能な限り自立的に、最小限の支援で作業遂行できるための支援方法の検討が求められる。そのためには、利用者が自立的に作業できているのかきめ細かなアセスメントとそれに基づく支援の手立てが必要であると考えられる。

利用者のより自立的な作業遂行を促進させるため支援の一つとして、自己管理スキルの有効性が示唆されている（竹内・園山, 2007）。利用者が、自らの作業の量や正しさを、見て分かる記録シートを使用する。そのような記録シートを使用することで、自己記録スキルの形成が促され、自立的な作業遂行が促進される。また、利用者の質の高い生活を実現するためには、自立的な作業遂行の促進が、施設での作業活動やそこでの役割にどのような影響を及ぼすかを検討することも必要であろう。利用者が自立的に作業を遂行できることで、担当できる作業量は向上し、また作業レポートリも拡大するのではないことが予測される。

本研究では、知的障害者入所更生施設の利用者 1 名の作業場面において、準備、作業遂行と確認、片付けという一連のアイロン作業を一人で行うこ

とを支援の目標とした。作業確認を自己記録できる記録シートを導入し、正しい作業確認ができるようになるかを検討した。利用者が自立的なアイロン作業を遂行できることが、利用者の作業活動や役割にどのような影響を及ぼすかを検討することを目的とした。

II 方法

1 事前アセスメント

S 知的障害者更生施設（以下、S 施設）の作業や利用者の直接観察を行い、施設内の全作業の内容を把握し、対象作業の選定をした。作業を選定した後、利用者の作業への参加状況と中断や逸脱行動の把握し、対象者の決定を行った。

2 対象作業

施設内で職員の使用しているエプロンと帽子にアイロンをかける作業（以下、アイロン作業）を対象作業とした。作業の場所は、S 施設の中にある就労移行支援事業である喫茶店の中であった。月曜日にエプロンと帽子の洗濯が行われ、火曜日以降、アイロン作業が行われた。仕上げの期限は、週末であった。A さんはエプロン 1 枚にアイロンをかけると 130 円、帽子 1 枚には 80 円の賃金をもらった。

3 対象者

アイロン作業を担当している知的障害者の A さんを対象とした。A さんは、47 歳の女性であった。新版 S-M 社会生活能力検査では、社会生活年齢 (SA) が 8 歳 4 ヶ月、社会生活指数 (SQ) が 18 であった。不明瞭であるが、日常会話をすることができた。支援者の言語指示には応じることができた。文字の読みでは、1 や 2 などの数字の 1 部や ○ などを読むことができた。書字では、なぞり書きや ○ を書くことができた。支援者は、アイロン作業のノ

ルマを達成できないこと、作業を自分で開始できないことを課題としてあげた。しかし、研究者が直接観察を行うと、そのことが影響してか、作業開始を自ら行ったり、ノルマを達成したりすることが多かった。作業に不要なおしゃべりもなかった。支援者がいなくても、一連のアイロン作業を一人で行っているように見えた。本人はアイロン作業をもっと上手になりたいと要望していた。

4 アイロン作業の実態把握

作業確認について、ベースライン期では、日によって作業確認を行う日や行わない日があった。その日のエプロンや帽子の目標枚数を全て確認しないで途中でやめてしまうことも認められた。正しい作業確認の仕方を理解していないと推測された。

5 支援期の手続き

確認カードには、正しいエプロンの折り方の見本の写真と誤ったエプロンの折り方の見本の写真を示した。「確認カードにあるように折り目がついていたら記録シートに○をつけてください」と写真と照らし合わせて折り方の確認を行い、折り方があっていれば記録シートに○を書いた。記録シートに全て○を書いたら支援者に確認をもらい作業を終了した。Y事業とX事業のエプロンと帽子を加えて、水曜日と木曜日を作業日に加えることを施設の職員に依頼した。

6 分析方法

ビデオ記録より、アイロン作業の確認では、アイロンをかけ終わったエプロンや帽子を青いかごから取り出して見たかを記録した。アイロンのかけ直しを行ったかを記録した。Aさんの正しい作業確認の状況を把握するため、ビデオ記録をもとに、ベースライン期と支援期の作業確認の手順を課題分析。

Ⅲ 結果

1 折り目の作業確認

図1にエプロンの折り目の作業確認とかけ直しの生起率を表示した。確認カードと記録シートを導入したセッション10以降、アイロンの作業確認の生起率は100%で、かけ直しは認められな

った。帽子も同様の結果であった。新たに追加されたY、X事業では、セッション1から確認カードと記録シートを導入しており、作業確認は100%で、かけ直しは認められなかった。

確認カードと記録シートを使用した支援期では、作業確認が全セッションのエプロンと帽子で認められた。アイロンのかけ直しでは、ベースライン期において、作業確認を行ったエプロンや帽子の

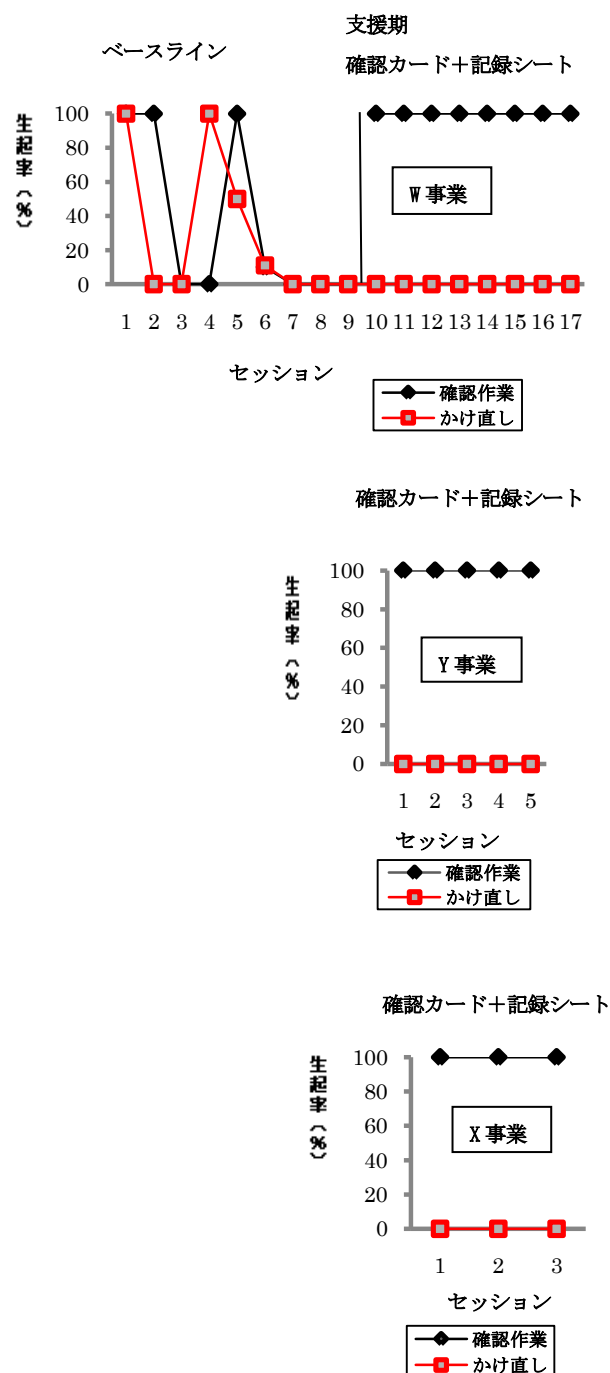


図1 エプロンの折り目の作業確認とかけ直しの生起率

全てに行うことがあった。また、作業確認を行わず、アイロンのかけ直しを行うことも認められた。確認カードと記録シートを使用した支援期では、アイロンのかけ直しは認められなくなった。

2 作業確認で認められた行動の変化

表1に、Aさんの作業確認で認められた行動の変化を示した。確認カードと記録シートの導入前では、アイロンをかけ直す、折り目をなでる。行動が頻繁であった。折り目をなでる、アイロンをかけ直す行動は、作業確認には必要ない行動であった。確認カードと記録シートを導入してから、折り目をなでる行動とアイロンをかけ直す行動は認められなくなった。

3 作業の依頼の増加

研究者が担当職員に対して確認カードと記録シートを導入した際に、エプロンの作業枚数と作業日の増加の依頼を提案した。そして、新たにY事業で使われているエプロンが追加された。Y事業のエプロンは袖付きのエプロンと袖無しのエプロンがあった。Aさんには袖付きのエプロンにアイロンをかけた経験がなく、今までの作業よりも難易度は高かった。既に実施していたW事業の成果から、Y事業のエプロンでは、初めから確認カードと記録シートを使用した。職員と協議し、袖付きのエプロンと袖なしのエプロンも、同様の作業確認を行った。作業確認の手順は同じであったため、確認カードと記録シートが使用できた。

新たに追加されたY事業のエプロンでも正しい作業確認をすることができた。その後、施設側よりY事業の成果から、全て袖付きであるX事業のエプロンを作業に加えていくことが提案された。新たに、アイロン作業にX事業のエプロンが追加された。

IV 考察

作業場面に導入した記録シートには、折り目の有無を自己記録した。記録シートに自己記録することが、次のエプロンや帽子に作業確認を行う手がかりとなった。自身の確認行動を記録シートに自己記録することで、作業確認を確実に遂行することができるようになったと考えられる。山本・

角谷・國枝(1999)は、手がかりとなる記録シートが常に示されたことで、対象児の自立的な課題遂行が高まることを示している。Aさんが記録シートや確認カードをいつでも見ることができる手続きが、自立的な作業確認を高めたと考えられる。

確認カードには、正しい折り目と誤った折り目を写真で示した。加えて、正誤の違いが明確になるように、折り目のどこに着目すればよいかの印に机上の青いカゴに貼りつけた。Aさんが作業確認をしようと思えば、いつでも何を確認すればよいかやどこが間違いかを示した確認カードで参照できた。写真や絵などの視覚的手がかりを用いて正誤を明確に伝えたことで、確認に伴う自己記録行動が容易になったと考えられる。

新たに依頼のあったY、X事業のエプロンの作業では、職員がAさんの一人で作業遂行している様子を見たことで、Aさんへの作業依頼が可能になったと考えられる。新しい作業である袖付きのエプロンへのアイロン作業は、W事業のよりも難易度の高い作業であった。しかし、作業確認も含めて、Y、X事業の袖付きエプロンのアイロン作業もこなせるようになった。このことは、作業量の増加だけでなく、アイロンがけできるエプロンのレパートリーを広げたことを示している。袖が付いた衣類は、エプロンの他にも多くある。エプロン以外の衣類でもアイロンがけできる可能性を広げたと考えられる。

文献

- 倉光晃子・園山繁樹・近藤真衣(2005) 入所施設においてひきこもりを示すダウン症者に対する介入—機能的アセスメントに基づく支援の事例的検討. 福祉心理学研究, 2(1), 48-58.
- 黒木康代・納富恵子(2005) 長期間持続していた服濡らし・放尿の行動障害への包括的アプローチ—知的障害者施設における実践を通して. 特殊教育学研究, 43(1), 21-30.
- 竹内康二・園山繁樹(2007) 発達障害児者における自己管理スキル支援システムの構築に関する理論的検討. 行動分析学研究, 20(2), 88-100.
- 山本淳一・國枝ゆきよ・角谷敦子(1999) 発達障害児におけるセルフ・マネージメント・スキルの獲得と般化. 発達心理学研究, 10(3), 209-219.

